

(←HP)

「藤久保プラム(PRM)」

校長 菅谷 和孝

今月は生徒会による「藤久保プラム(Pink Ribbon Monthly)」が実施されています。これは昨年度から実施している活動で、カナダのピンクシャツデーをモデルにいじめ撲滅をねらいとした活動です。モデルとしているピンクシャツデーとは、2007年のカナダ・ノバスコシア州での出来事で、内容は下記になります。

<ピンクシャツデーのはじまり>(日本ピンクシャツデー公式サイト参照)

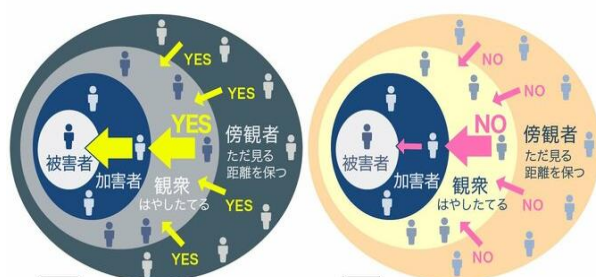
当時中学3年生の男子生徒がピンク色のポロシャツを着て登校したことをきっかけに、周囲から揶揄われたり暴行を受けたりし、ある日耐え切れず帰宅してしまいました。その出来事を聞いた2人の上級生(高校3年生)が「いじめなんて、もう、うんざりだ！アクションを起こそう！」と思い、その日の放課後、ディスカウントストアへ行き75枚のピンク色のシャツやタンクトップを買いこみました。そしてその夜、学校のBBS掲示板やメール等を通じて「明日、一緒に学校でピンクシャツを着よう」とクラスメートたちに呼びかけました。翌朝、2人はピンク色のシャツやタンクトップを入れたビニール袋を手に登校しました。そこで学校に着き、校門で配りはじめようとしたふたりの目に映った光景、それはピンクシャツを着た生徒たちが次々と登校してくる姿でした。ピンクシャツが用意できなかった生徒たちは、リストバンドやリボンなど、ピンク色の小物を身につけて登校してきました。頭から爪先まで、全身にピンク色をまとった生徒もいました。ふたりの意思は一夜のうちに広まっていたのです。2人が呼びかけた人数より遥か多く、数百人もの生徒たちがピンクシャツやピンク色のものを身につけて登校してきたことで、その日、学校中がピンク色に染まりました。いじめられた生徒は、ピンク色を身につけた生徒たちであふれる学校の様子を見て、肩の荷がおりたような安堵の表情を浮かべていたそうです。以来、その学校でいじめを聞くことはなくなりました。いじめに対して、学生たちは言葉や暴力ではなく行動で意思表示をしようと立ち上がったのでした。

本校ではこの取組をモデルに、藤久保プラムと称して6月・10月・1月を強化月間とし活動しています。この取組に賛同してくれる仲間を募り、賛同者は藤久保PRMカードに記載し携帯します。また、何かしらピンク色の物を身につけ、「いじめを しない させない 見過ごさない」をスローガンに活動しています。

いじめには4層構造が関係していると、いじめの研究者、森田洋司さん(大阪市立大学名誉教授)は唱えており、その構造は右図のようになります。

いじめを減らすためには、観衆や傍観者がいかにいじめを起こさせない行動をとれるかが重要となります。また、いじめは一般的に社会通念上のいじめをイメージすると思いますが、法令上、本人が嫌だと思えば法令上のいじめとなり、簡単に説明すると下記の内容も法令上のいじめになります。また、たいていの事案は喧嘩やトラブルが双方の間で起きておりますので、互いに嫌な感情になっ

いじめの場の空気を最初に変えるのは「傍観者」



(出所) ストップいじめ！ナビ

行為の 故意性 意図性	好意で行った 言動	意図せずに 行った言動	衝動的に行った言動		故意で行った言動	
			暴力を伴わない	暴力を伴う	暴力を伴わない	暴力を伴う
	親切のつもり が…	悪気はなかっ たのに…	つい、カッとなって…		あの子がむかつく！	
			法令上のいじめ			
					社会通念上のいじめ	

ていることから、被害側であり加害側にもなるということになります。

このことからわかるように、いかに相手のことを考え、想像しながら行動や発言をし、互い



が表面上だけのコミュニケーションで判断しないようにすることが大切になります。また、第三者的な感覚が重要で、観衆や傍観者が NO と言える環境が重要となります。

藤久保中学校では、この藤久保 PRM の活動を生徒自らが推進していくことで、1つでもいじめが起きない環境を目指しています。地域の皆様も、強化月間におけるピンク活動にご協力ください。藤久保中学校の取組をきっかけに、三芳町各小中学校のいじめが無くなることを目指して。